

福島の木材リング築く

「復興のシンボルに」



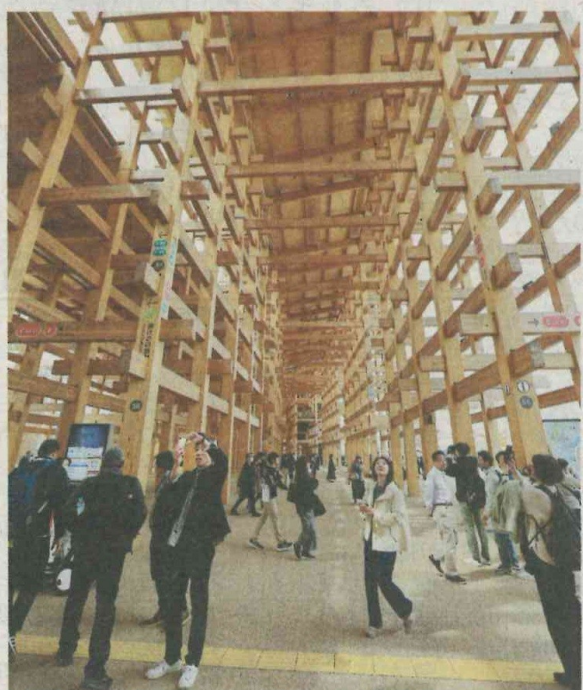
集成材の仕上がりを確認する朝田さん。工場内は木のいい香りが漂う(3月11日、福島県浪江町で) 上 万 俊 弥 撮 影

きょう開会式

ZOOM EXPO

浪江の業者 風評被害越え

13日に開幕する大阪・関西万博で、シンボルとなる巨大な木造建築・大屋根リングの一部には、福島県産の木材が使われている。福島県産の木材産業は、東京電力福島第一原発事故の影響で風評被害に苦しんできた。製造した同県浪江町の加工会社「ウッドコア」の取締役、朝田英洋さん(57)は「リングが復興のシンボルになってほしい」と願う。(上 万 俊 弥)



リングの梁や柱の一部には、福島県産の木材が使われている(5日、大阪市此花区で)

大屋根リング 会場デザインプロデュサーの建築家、藤本壮介氏が設計した。1周が2キロ、幅が30メートル、高さが最大約20メートル、建築面積6万1035.55平方メートルで、「最大の木造建築物」としてギネス世界記録に認定された。閉幕後に解体されることになっているが、一部をモニュメントとして残す案が出ている。

リングを下から見上げると、柱と梁が何重にも組み合わされ、壮観だ。用いられたのは、複数の板を接着剤で組み合わせた集成材。反りや割れが起こりにくく、耐久性に優れているのが特徴だ。「ウッドコア」は、リングの柱と梁の約3分の1を占める6600立方メートルを担った。このうち3500立方メートルは福島県産材を使用した。朝田さんは「巨大なリングをしっかりと支える福島産材の品質の良さを、世界にアピールできる絶好の機会になる」と期待する。

浪江町は林業が盛んな地域で、朝田さんは、4代続く製材業「朝田木材産業」を営んでいた。創業100年を翌年に控えた2011年3月11

日、東日本大震災に見舞われた。

従業員は無事だったが、工場の一部が倒壊。原発事故で放射性物質が漏れ、町内全域に避難指示が出された。朝田さんは千葉や東京を転々とし、翌12年に福島市に移った。立ち入り許可を得て、防護服と線量計を身につけ、事業所を片付けた。

除染が進み、14年に事業を再開したが、風評被害に直面した。町外から仕入れた原木を工場加工しただけで「浪江は印象が悪い。周りにある商品も売れなくなる」と販売を断られた。営業再開後1年の売り上げはほぼゼロだった。

震災後、町内で林業に携わっていた人の多くは廃業していった。「人間が適切に管理することで、豊かな山を将来に残せる。ここで、くじけてはならない」。朝田さんはそう決意し、住居用の建材製造から、くいなどの土木用資材へと転換し、なんとか事業を続けた。

17年、町の中心部で避難指示が解除されたが、働き口がなく住民の戻りは鈍い。そんなとき、復興事業の一環で木材加工の工場新設計画が持ち上がった。

18年、県内の別の企業と共同でウッドコアを設立。21年、原発の北約10キロの場所で工場が稼働すると、初仕事は万博のリングとなった。技術力の高さを買われたのだった。

リングの計画を聞かされたときは「そんな大きな木造建築を作ることができるのか」と半信半疑だったが、浪江で培ってきた技術を知ってもらおう好機になると奮起。工場の責任者として、従業員約50人を率いた。

来場者に安心してもらうため、福島県産の木材は放射線量を測定し、安全に利用できることを確認した。現地を訪れ組み上がっていくリングを目の当たりにして「こんなにすごいものを浪江でつくっているんだ」と胸が熱くなった。開幕日には、会場で、来場者がリングの屋上を散策する光景を目に焼き付けようと思っている。

町内は、現在も広い範囲が帰還困難区域に指定されているが、研究機関や企業の拠点が新設され、街並みは徐々に変わりつつある。「世界中の人がリングに触れ、新しく生まれ変わった浪江のすばらしさを知ってほしい。それがきっかけで、復興への力になるはずだ」